

## 令和4年度 第1回 岐阜市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和4年7月21日（木）13時30分～15時30分
- 2 場 所 岐阜市役所庁舎 6-1 大会議室
- 3 出席者 柴橋市長、水川教育長、川島委員、横山委員、武藤委員、伊藤委員
- 4 招聘者 結の舟 代表 平工顕太郎氏
- 5 傍聴者 一般0名、報道関係者2名
- 6 次 第 (1) 市長あいさつ  
(2) 協議  
「デジタルとリアルを組み合わせた創造的な学び」  
(3) その他
- 7 議 事

(13時30分開会)

---

### ○佐藤事務局長

ただいまから、令和4年度第1回岐阜市総合教育会議を開会いたします。

本日、司会を務めさせていただきます教育委員会事務局長の佐藤でございます。よろしくお願いたします。

本日は、柴橋市長、水川教育長及び川島委員、武藤委員、横山委員、伊藤委員に御出席をいただいております。なお、加藤委員におかれましては、御都合により欠席となります。

また、会議の招聘者といたしまして、結の舟代表 平工 顕太郎 様に、御多用の中、御参加を賜っております。

それでは、皆様、本日はよろしくお願いたします。

これより着座にて失礼いたします。

傍聴者の皆様に申し上げます。傍聴に際しましては、受付で配付いたしました傍聴人の遵守事項に記載した事項の遵守をよろしくお願いたします。

次に、本日の資料の確認をさせていただきます。皆様のお手元には、次第及び席次表、資料1から3及び参考資料1、2をタブレットに収納し、御準備しております。不足等ございましたら、挙手をお願いいたします。次第及び席次表、資料1、2、3及び参考資料

1、2でございます。

それでは、次第に沿いまして会議を進めます。

まず、柴橋市長より御挨拶をいただきます。よろしくお願いいたします。

## ○柴橋市長

皆様、こんにちは。令和4年度第1回の岐阜市総合教育会議に御出席いただきありがとうございます。本来なら、加藤委員ようこそお越しいただきましたとお話ししたかったのですが、本日は御欠席でございます。教育委員会では、新たに加藤委員をお迎えして定例会等既に開催されていると思っておりますけれども、新しい体制で今年度もよろしくお願ひしたいと思ひます。

総合教育会議ですが、今年度も引き続き6回の開催を予定しております。昨年度は教育大綱の具現化ということを主軸に大いに議論いたしまして、ご存じのとおり、今学校現場では連絡アプリなども実際に使っていており、様々な声をお聞きしておりますけれども、こうして一つひとつ形にしていくということはとても大事なことだと思っております。今年度も多岐にわたり、この総合教育会議で皆様方に御議論いただき、一つひとつ形にするということを心がけて取り組んでまいりたいと思ひます。

平工さん、本日はお越しいただきありがとうございます。私は数年前に平工さんという本物に触れる機会がございまして、川舟に乗せていただき、長良川の魅力を存分に体感させていただいたことは懐かしい思い出です。今日はふるさと岐阜市というテーマでお話をさせていただくわけですが、子どもたちが平工さんに触れると、きっとこの長良川の魅力、自然の魅力を五感で感じ、中には我こそは川漁師になってみたいという子がでてくるかもしれません。平工さんのように、本気で取り組んでおられる方、自分の人生をかけてそのことに打ち込んでおられる方のお話やそのお姿に、子どもたちにはたくさん触れてほしいと思ひます。また、学校の先生になりたいという方や教育学部の学生とお会いする機会があって、なぜ学校の先生になりたいのですかと聞いたときに、親が先生だからという場合もあるのですが、やはり、自分が大きく影響を受けた恩師との出会いということを言われることがあります。これは、日頃の学校の中で先生という本物に触れているから自分もそうなりたいと言ってくれるわけで、この少子化の時代にあっては、非常に貴重な人材となるのです。このように、子どもたちには、職業の別を問わず本気になって取り組んでいる岐阜の諸先輩に、多く触れてもらいたいといったことを思いながら、今日はその代表とし

て平工さんにお越しいただきました。ここが実際の長良川ではないということだけが残念ですが、ぜひ思いの丈をたくさんお伝えしていただけることを、本日は楽しみにしてまいりました。今年度も委員の皆さんには大変お世話になります。どうぞよろしくお願いいたします。

**○佐藤事務局長**

ありがとうございました。

次に、次第の2、協議に移ります。

資料1につきましては、本来事務局より御説明させていただくところですが、出席者の皆様には、本件について事前に御案内させていただいておりますことをもって、会議の進行上、提示のみに代えさせていただきます。何卒よろしくお願いいたします。

本日のテーマは、『「デジタル」と「リアル」を組み合わせた創造的な学び』についてでございます。

では、まず、事務局より御説明申し上げます。

皆様、タブレット内の資料2を御覧ください。

**○吉元学校教育デジタル化審議監兼GIGAスクール推進室長、GIGAスクール推進室 栗本主幹**

(デジタルを活用した学びの推進について 説明)

**○星野学校教育審議監兼学校指導課長**

(岐阜市学「ぎふ未来」について 説明)

**○佐藤事務局長**

事務局からの説明は以上となります。

続きまして、平工様より御講演を賜りたいと思います。

皆様におかれましては、タブレット内の資料3を御覧ください。

**○結の舟 代表 平工顕太郎氏**

この度はお声がけいただき、ありがとうございます。平工と申します。

先ほど柴橋市長から御紹介いただきましたとおり、以前お会いしたときは、Tシャツ、短パンでサンダルだった記憶がありますので、今日はこのような形で再会できることを大変うれしく思います。今、星野様の御説明にありまして、僕はこの町で生まれ育ちました。平工という名字は岐阜城の南山麓、長森の地に多く、父親は長森、母親は加納で育っていますが、なぜ自分がこのような職業に就けているのかを、今、星野様の話を聞きながら思い返していました。30年以上前のことですが、今でも脳裏に焼きついている光景が幾つかありまして、例えば小学校の下駄箱の横の水槽で飼育されていたオイカワ、この町ではイカダバエという名前の魚の婚姻色がすごくきれいだったことを今でも覚えています。また、この町はコイ科のフナやオイカワが多く、板取村でサケ科のアマゴに出会ったときには、何という川魚がいるのだという感動を覚えています。そうした原体験があって、大学では水産学を学びました。10代最後の夏には、飛騨の萩原でアジメドジョウを見たときに、ドジョウは泥という漢字を用いますから、普段は田んぼや用水路などでみかけるのに、清らかな冷たい流れの中で岩にへばりつくタイプもいるのかと驚いたことをよく覚えています。水産学を学んではいたものの、学生の頃は知らないことが本当に多く、年を重ねるにつれて様々なことを経験し、考える中で、この地域の核となる職業「川漁師」に出会いました。この職業には資格制度もなければ若手育成のプログラムもありません。しかし私は今、日本を代表する航空会社や鉄道会社、そして百貨店と契約を結び、この町の川魚という商材を武器に、子ども3人、家族を養っています。私がなぜこのように、大人になるにつれて、ふるさとの資源を活用して生計を立て、有名にしていくことできたのかをお伝えすることで、この町の子どもの何かお役に立てるのかなと思っています。

設定としてはとても強引ですが、本日は私が小学3年生であると仮定して話をしたいと思います。私が初めてアマゴに出会ったときの年齢の子どものに憑依したという設定で、この町のことを大人たちに紹介したいと思います。私の生活圏は狭いです。ここが御料場、このような和船でふだん生活をしておりますが、今日憑依する子はこの子です。川があれば舟でどこでも行けるというイメージがありますが、実際には普段から長良川を行き来することは難しく、春の出水、雪解けの水が流れてくるときに水位が増しますので、我々はそのときに舟に必要な道具を上流から運んでくるということを毎年やっています。そのお手伝いをしている子どもです。春の出水に向けて、これが青竹ではないことに気づきましたか。運ぶのが4月と分かっていますので、1、2月の段階で切っておいて、水辺で乾かしておくのです。年間を通し、四季を感じながらスケジュール感をつくっています。今日

のお話の舞台ですが、この会場から5分のこの風景の中のお話だけで完結させていただきます。岐阜市は広いですから、長森、梅林、柳津、様々な場所でいろんなお話ができると思いますが、今日、私が30分間いただいておりますのは、この小さなエリアだけのお話だと思ってください。私の住まいも在所もこの中にございます。

では、始めさせていただきます。

僕の町は、こんな町です。およそ450年前に、織田信長が岐阜と名づけました。そこを流れる長良川を、昔の漁師さんはこのように言っていました。長きにわたり良き川だと、長良川と漢字を当ててそう言っていました。春になると、水辺ではこのような風景が見られます。皆さん、見ていてください。画面右下、くるぶしぐらいの水深だと思ってください。岐阜市にはアユという魚がいますが、彼らはずっとこの町で生活しているわけではありません。春先、雪解けの水が温かくなる頃、稚魚たちは群れになって川底の石を真っ黒に埋め尽くすように伊勢湾から上ってくるのです。これに出会うと漁師さんたちはわくわくして、いよいよアユの季節だなと感じるシーズン最初の光景です。この魚をどう捕るか、漁師さんたちはいつも考えているのです。ぼうちょう網漁をお見せします。先ほどのアユは僅か10グラム、指ぐらいの大きさですが、天敵である水鳥を模した黒い布をさおの先端に当ててコントロールしています。ぼうちょうというのは制御する、コントロールするという意味がありまして、4人1チームでこの魚を四つ手網に追い込む。これが4月の岐阜市で行われています。この町のシンボルの金華山、そして、そびえ立つ岐阜城のふもとには木の舟があるのです。コウヤマキというのは木曾五木の1つ、秋篠宮悠仁様のお印の木にもなっている日本固有種です。この木を使うのが僕らのプライドです。この町の特徴です。金華山では金のツブラジイの花が大いに輝き、この季節になるといよいよ川でこのような光景に出会います。雨は全く降っていないのに、川が濁るのです。これは流域の人々が活動している証拠です。代かきです。雨が降っていないのに川が茶色いのは、これから田植が始まるからです。川を見ていると、多くの情報を自然からキャッチできるのです。舟は手漕ぎです。さおとかい、この2つだけを使います。ゆっくりゆっくりと流れに乗っていくのです。宮本武蔵が、かいを削って刀にしたという有名なお話があります。アカガシという木は木刀と同じく、このかいの材です。もう一つのさおはこちらです。かいは1年、さおは3年とあって、かいは簡単に使えるようになるのですが、さおは3年程で、ようやく自分の好きなところでいかりを打たずに舟を止めるところまでできるようになるのです。そうなるといよいよ漁という次の段階に入ることができるので、漁師さんたちはま

ず舟を越すといいますが、舟の操船から教わっていきます。漢字で書くと、棹、櫂、足半、これらの道具を使っています。竹もさお尻のサカキの木もアカガシの木も、全部川に寄り添ったところから調達しています。足半は実は欠かせないもので、河原の石の上を飛び跳ねるように歩く時や、舟の中では狭い中で揺らさずにこがなければいけない時に、とても役に立つ仕事道具です。その舟を使って、4月1日からアユが解禁となる5月11日まで、伊勢湾から上ってくるサツキマス漁をしていきます。サツキマス漁の解禁は、皆が待ち望んでいるものです。少し下世話なお話ですが、この後、見えている数字にゼロを2つ足してください。魚屋さんが仕入れる値段になります。様々な人を経由し、皆さんの口に入る頃にはとても高価な魚になりますが、このサツキマスは、まさに伊勢湾とのつながりの中で、岐阜市で捕れる最も高価な魚です。

いよいよ夏が始まりますが、これは千鳥橋の光景です。アユはかなり成長しています。これはアユの唇の跡です。我々はまずこれを探します。私たちは魚を捕らなければなりませんので、アユの居場所を探る必要があるからです。生き物には世界共通の名前である学名というのがあり、アユは、あぶらびれがある、サケ、マスと同じ仲間に入っていました。最近独立しました。それは、先ほど説明した特徴的な唇を持つからです。学名にも表れていますが、ひだになった舌という意味で、アユは一属一種という特別な魚になっています。この特徴的な唇の跡であるはみ跡を見ると、アユの全長が分かります。全長が分かれば体高が分かります。その体高を踏まえ、漁師はどの網を使うか見定めていきます。岐阜市の漁師は、今でもセンチ、ミリではなく、着物の鯨尺を使っています。例えば大工さんはかね尺です。岐阜市では鯨尺、関、美濃、郡上ではかね尺を使います。岐阜市には網屋さんが1軒ありますが、漁師から電話を受けると、あなたのお住まいはどこですか、鯨尺、かね尺どちらですか、からやりとりが始まります。注文の際、鯨の8とかねの1寸とが同じ寸法なので、間違えると大変です。ここは鶺鴒大橋と長良橋の間です。アユがいました。いよいよ網を打ちます。本当に簡単です。1、2、3、4、5秒あれば魚は捕れるのです。ぱっと投げればそこにいる魚が捕れてしまうのが面白いと思いませんか。岐阜は本当に生き物にあふれた町なのです。投網という言葉をよく聞くとと思いますが、我々が投網を使うことはありません。岐阜の漁師は、最もポピュラーな漁法として、テーナ漁を用います。このように網を投げて、5秒とたたないうちに魚が捕れてしまいます。そして、捕れたらすぐ水揚げしています。生きたままアユを捕ることは、難しいようで簡単です。我々漁師にとってはとても簡単なことです。1、2、3匹かかっていた。5秒で3匹

も捕れるのです。アユは様々な町でシンボルとなっていますが、岐阜市のアユは、ここにたどりつくまでに長い距離を移動してきますので、スリムで流線型していることが特徴です。我々は市場で毎日魚を見ているので、長良の魚か、飛騨の魚かわかるのです。アユは、昼と夜で習性が違っており、また先ほどのテーナ漁を夜に行うことはできないため、夜には寝床を襲撃するような捕り方をすると、効率よく多くのアユを捕ることができます。有名な鵜飼もこの習性を利用しています。宮内庁式部職の鵜匠は岐阜市に6人おり、鵜を使って捕ったアユは年に8回、実際に皇室に献上されています。鵜匠は1人では鵜飼を行えません。この町の文化である鵜飼を支えているのは、実は鵜匠1人ではないということを知っていただきたいと思います。漁師さんたちや地元の人が船頭として鵜舟に乗り込むことで、1,300年もの間、この鵜飼いが続いてきたのです。年に8日間だけ行われる御料鵜飼の鵜舟の中の写真をお見せします。御料鵜飼の日、鵜匠はいつも以上に本気です。鵜匠の傍らで舟をこいでいると、鵜匠が漁をしながら、鵜にありがとうと言うのです。皇室に献上しなければならぬプレッシャーがどれほどのものかが分かります。アユに鵜のくちばしの跡がついているのが分かりますか。これがその日のうちに宮内庁職員の手に移り、その日の晩の最終便で、実際に皇室に運ばれていくのです。桐箱に入れられ、県知事の名前や市長の名前で運ばれていきます。8回行われる御料鵜飼のうちの2回は、駐日大使とその御夫人をお招きする外交団鵜飼となっています。信長の時代から続く客人に対するおもてなし文化は、時の権力が移っても、今なお皇室の、国の行事として行われ、この地に根付いているのです。一方で、職務として献上することがない私たち漁業者は、捕ったアユをどうしているかご存じですか。岐阜市の中央卸売市場は、公設の卸売市場の中で唯一天然アユや川魚のせりが行われており、私たちの暮らしを支えてくれています。これは岐阜市の大きな特徴です。ご覧になったことがあるかもしれませんが、実際にこの木箱一箱で取引されます。あんこと呼ばれる人がせりを取り仕切っています。ここに並ぶアユは、岐阜市のものだけでなく、西濃、東濃、中濃、奥美濃、南飛騨、奥飛騨等、岐阜県全域から毎朝集められています。僕らが生活を営んでいけるのはなぜだと思いますか。それはそこに需要があり、買ってくれる人がいるからです。これが成り立つのは岐阜だけです。愛知県で同じように魚を捕っても、私は愛知県では生活ができません。ちなみにアユの値段はこれぐらいです。よく目にする養殖のスーパーのアユと、こちらのアユとで桁が違うのにお気づきだと思います。一箱に20匹入っていたとすると、単価が計算できると思います。また、大相撲名古屋場所が開催されていますと、経済ともリンクしていますので、

アユの値段は上がります。我々は、そんな需要のあるアユを、気象条件が悪くても、水が濁っていても、増水していても捕らなければなりません。郡上漁協や関、美濃の中央漁協にもありますが、岐阜の長良川漁協では、鵜飼を含め鮎の漁法が19漁法あり、網を張る、網を投げる、釣りざおを使う、尖ったもので刺すだけでなく、鵜を使う、あるいは鵜を模したものでコントロールする等、多様です。瀬張網漁という特有の漁をご紹介します。岐阜市にはヤナがなく、落ち鮎の時期には瀬張網漁を行いますが、これは、魚とかなり高尚な知恵比べをしています。

秋の岐阜市に入ります。166キロの長良川、そこに流れこむ吉田川、板取川、津保川などのアユを含め、流域全てのアユのおよそ90%以上がこの岐阜市内で卵を産むとされています。そのため、鵜飼が終わった後の1、2か月は、私たちにとってはお祭りの時期です。この時期は、アユを狙って一緒に下ってくる生き物がいます。この岐阜市で水揚げされているモクズガニというカニです。上海ガニというところではないでしょうか。このカニは、岐阜市の長良地区では鵜飼が閉幕する10月15日の翌日解禁です。岐阜市で捕れるのは約1か月間で、アユと一緒に上流域から下りてきて、この町を經由し、海へと下っていきます。ジャパニーズミトクラブとあって、このように手袋をしているように見えます。アユの話に戻ります。下ってくるアユを落ちアユというのですが、何もしなければ下って行ってしまいます。では、どう足止めするのでしょうか。漁師さんたちは、色と音で足止めします。これは水中の映像です。動きを見ていてください。水は左から右に流れています。瀬張網といっても、網はどこにもございませんが、魚の動きが封じ込まれているのが分かりますか。川底の色と水面の音、この音も水の流れを利用して出していますが、全て自然任せでアユの動きを止めることができ、一網ですごい量が捕れます。このアユは、岐阜の郷土食のなれずしへと変わっていきます。アユを開き、塩漬けにし、米飯をぎゅうぎゅうに詰めていくことで嫌気状態が保たれ、30日の乳酸発酵でなれずしが出来上がります。かつては尾張藩に保護され、この岐阜町から江戸の将軍家に献上されていました。その道は、今でも御鮎街道として実在しています。これが岐阜の誇るなれずしです。

少しだけおさらいをします。アユは年魚といわれるように、寿命が1年なので、約10グラムの春先の風景から始まり、たった3か月で大きくなり、秋になって落ちてきました。ここまで僅か半年です。生涯の半分を川で過ごすのですが、実はあと半分は海で過ごしていますので、子どもたちからよくこう聞かれます。アユは川魚なのか、それとも海の魚な



のか。皆さん、どう答えますか。私はとても困ります。半分は海で過ごしているからです。その答えは、両側回遊魚です。両側は、「りょうそく」と読みます。私がこの町でなぜこの仕事をしているかという、やはり回遊タイプの魚と出会ったことが本当に大きいと思っています。これはほかの町ではおそらく味わえないことだと思います。もちろんその代表格はアユですが、その他にも様々な魚や生き物が海から来ますし、上流域から落ちてきます。この右下のアユカケという魚を見たことはありますか。千鳥橋付近で何年かに1度という割合で出会えるのですが、福井の九頭竜ではアラレガコという名前で呼ばれる高級魚です。本流にダムがないというのは回遊魚にとって本当によいこととして、雨が降ると確かに水かさが増すのですが、それもまた川自身の自浄作用なのです。河原に目を向けますと、着草した植物の芽も、芽吹いた若葉も石も全部流れますので、砂礫河原という白い河原が保たれます。この白い河原も長良川の特徴だと思います。砂礫河原があるということは、小魚たちもこの水辺を上ってくることもできるのです。そのため、放流に依存しない天然魚がこの町にはあふれています。砂礫河原の水際でおこなう登り落ち漁は、700人いるこの町の漁業者の中で30人にしか許可されていない特殊漁法です。与えられた占有地では、自分で流れをつくって魚を呼び込み、登らせるのですが、最後の出口で落とし箱に落とし込みます。捕れる魚は、岐阜ではうりりという名前で出回っていきまして、関、美濃に行けばうるんちよ、郡上ではちちこ、じゃちこなどと呼ばれます。一般的には、ごりという名前だと通じます。これも市場に行けばかなりの値段で取引され、料亭が仕入れていかれます。岐阜市には長良川最大の川湊があります。岐阜の名産「イカダバエ」をご存知でしょうか。この名前の由来ですが、奥美濃の上質な木材を山から切り出して筏を組み、長良川の流れにのせて川湊へと運びます。貯木場でもあった岐阜の川湊では、筏の下にハエ（標準和名：オイカワ）が集まります。それを捕って食べたところ美味しかったそうで、そんなところからイカダバエと呼ばれるようになりました。イカダバエは寒の時期になるとおせちに入ってきますから、アユ漁が終わった、12、1月の寒い中を捕りに行きます。続きまして、こちらの魚は地元では川ゴイ、標準和名をニゴイといいます。お正月頃に流れの芯でジッとしているところを襲います。舟で近寄り、舟の上から突くのです。ひし漁といいます。こうした営みが、鶺鴒も終わって人が少なくなった川の中で行われているのです。魚だけでなく、亀、カニ等様々なものがターゲットになり、全ての水の恵みが私たちの暮らしを支えてくれています。次のスライドでは、岐阜の方言ばかりを並べました。上から2番目のアジメは、アジメドジョウのことです。ムギカラは御存じですか。

俳句の季語にもなっています。初夏に捕れるドジョウですが、ムギカラドジョウともいい、正式にはトウカイコガタスジマドジョウという名です。次のスナクジも岐阜の方言です。水川教育長は御存じですか、スナクジ。砂と関係があるのですが、正式にはカマツカという魚で、これは市場に出荷されない川魚です。こうした放流に依存しない天然魚が、この町にはあふれているのです。

ここまで話してきたように、この町には、長良川の自然やそこから生まれた歴史、文化など、この町ならではの地域固有の財産が沢山あるのです。そうした中で、同じく古くから利用されている和船という道具を使うことで、この町に特化した、この町ならではの特別な体験を提供できるのではないかという仮説を立て、事業を立ち上げてずっとやってきています。このプログラムでは、実際に子どもを川の中に入れます。清流の国、清流長良川など、長良川を様々にブランディングしてきましたが、そのブランドの核の部分となる実際の川には、危険も伴いますので、子どもたちを近づけることが少ないと思っています。

今日のテーマとつながりますが、地域の宝であるはずの川に近づかずに、どう愛を育むのかなというのは、実際のところ誰でも感じると思います。和紙、うちわ、和傘、工芸品や芸能等、全て川に結びついているのは子どもたちも分かっていますが、川そのものの価値、楽しさを直接知る必要があるのではないのでしょうか。水難事故の危険性については、もちろん理解しています。大人は自らが積極的に近づかなければ事故は起きませんが、子どもたちはどうでしょうか。例えば、河原を歩くときに革靴で行ったとしましょう。歩きにくいです。こういった石の上を歩くとつまずきますよね。これを一度知れば、次はスニーカーで行かなければならないということが分かります。一度体験をすれば、次に向けて備えができるのですが、その機会を奪うということは人を育てることを放棄することと同じなのではないのでしょうか。ここで営む仕事や暮らしは、遊びの延長だと思っています。遊びながら、たくさんの学びを常にキャッチして次世代の人に伝えていますが、これが隣の木曾川で同じようにできるかというところできないと思います。親水性の高さが際立つ岐阜市だからできると思っています。鶺鴒ミュージアムに展示されているような道具は、使わなければ意味がないと思っていますので、自分のパートナーである和船や伝統用具を積極的に使い、一般に開放して体験を提供しています。危険があることは承知していますが、だからこそリスクをマネジメントして、経験豊富な人材を配置することで、安全にその体験を提供しています。この体験事業では、我々の物差しで何かしたいという意図がもちろんあって、そこにストーリーを持たせることでパッケージとしてよい商品が出来上がるの

ですが、パッケージ化は、大人からお金を頂くためのものであって、実際に体験をしていく中で、子どもたちは自分で自分の物差しをつくり始めます。子どもたちは、遊びながら学んでいるのです。例えば、カニは普通赤いのですが、箱眼鏡で水中を見ると、モクズガニは黒く、周りの石と同じ色になっているように見えます。なぜだと思いませんか。これは、青魚であるイワシやサバの背中が青いのと同じです。生き物に触れると様々なことを考えます。その答えは正しいか分からないですが、子どもたちも考えるのです。就学前の子ども1人で遊びだします。周りの大人がその子に対してできることは、すごい！と言ってあげることだけです。しかし、すごいと言われた子どもたちは、達成感を感じ、自信をつけます。そうすると、自分で違う捕り方を開発していくのです。私の場合は、こうした体験を積み重ね、年齢を重ねていくうちに、捉えた生き物が食べられる、あるいはお金に換えることができることを知っていきました。そして、生計を立てるために仕事にすると決めた瞬間に、この水辺の環境を持続させる責任が生まれたのです。僕がこの仕事を続けるためには、今あるこの水辺の環境に責任を持ち、持続させていく必要があるため、人の育成やこうした活動にも取り組んでいます。

大学の先生が見つけれなかった魚を自分が捕まえたこの感動もまた1つ、一生残る体験になると思います。

そして、環境省が指定した水浴場があるというのもよい環境だと思っています。この体験事業では安全に十分配慮して川で泳いでもらうのですが、ここで泳いだことは、子ども本人だけでなく、それを見守る親御さん、あるいはこの町を訪れ、この体験事業に参加した大人の観光客にとっても、一生の思い出になると感じています。この体験は、就学前、あるいは泳ぎの苦手な子どもも参加できます。僕は0歳や1歳の子ども川に連れていきます。岐阜県のホームページを見ると、川に近づくことはあまり推奨していませんが、1歳の子でもきちんとのマネジメントをすれば、様々な体験を提供できると思います。

ですから、こうした実際の姿を安全に十分配慮しつつリアルに感じてもらうためには、その姿を十分熟知している地域の経験豊富な方に、実際の現場でレクチャーして頂くことが必要だと思っています。本日は、このエリアの景色となりわい、暮らしについてお話ししていますが、それぞれのエリア、水辺に応じてお話ができると思っています。

例えば、相手のことをよく観察し、クリアできるだろう小さな危険をわざと与えることもひとつの手です。私が小学3年生の頃、川に潜って魚を見ていたとき、体が流れに飲まれてしまったことがありました。必死で石にしがみつこうとしましたが、アユがいる川は、

餌になるコケが生え、滑りやすくなっていてなかなかつかめません。その時は事なきを得ましたが、体が流されるという危険な思いをして以降は、自分自身で備えを考えるようになりました。子どものレベルに合わせて、あえて危険を提供すれば、子どもたちは自分で自分の身を守ることを考えます。子どもが水際にいたら、危ないから川に入らないでと言うと思いますが、川に行かせない、入らせないことは、子どもから知る機会を奪うこととなります。川について、小さい頃から年齢に応じた段階的な学びがないことで水難事故が起きてしまいます。水難事故が起こると、私たちは何故このような場所で、とってしまいますが、それはその場所の特徴を知っている大人の目線であって、子どもたちは知らないのです。私たち大人がすべきことは、こうした“リアルな学び”の機会を与えることではないでしょうか。岐阜市に広がっているこのフィールドや資源を使い、そこで暮らし、仕事をし、リスクを熟知している大人が場を提供することで、学校では教えることができない学びが実現できると思います。

実際に、岐阜県の事業や大学の課外授業の現地講師として、県民の皆さまや学生さんを川に招くことや、アクア・トトぎふや民間団体とも連携して水辺で様々な体験教室のガイダンスをしています。水族館では、生き物の解剖もしています。ここにいらっしゃる皆様の中にも、子どもの頃、魚当を解剖した記憶があるのではないのでしょうか。このような体験を今でも覚えていらっしゃるということは、体験はやはり面白いということです。子どもたちと触れ合う中で、子どもたちが積極的に知りたいという気持ちを持っていることが初めて分かりました。

長良中学校は海洋教育に取り組んでおり、私はそこで講師をしていたのですが、その授業はとても印象的でした。1回目の授業は、学校の教室に行ってお話しをしました。2回目の授業は、私のフィールドに来てもらいました。木の舟に乗り、この町の特産品であるアユを踊り串にして炭で焼き、川を見ながらみんなで食べたことを覚えています。

ここまで、アユという切り口から話をしてきましたが、岐阜市はアユ以外の生き物がたくさんいることも魅力です。例えば、カワヒガイという魚を御存じですか。カワヒガイは二枚貝に卵を産むため、二枚貝がなければ生きていけません。では、二枚貝が育つ環境はどうしたら整えられるのでしょうか。アジメドジョウは、伏流水がなければ冬を越して卵を産めません。岐阜市では、カワヒガイもアジメドジョウも見ることができます。カワヒガイやアジメドジョウがいるということは、多様な生物相が保たれていることや、地下からの水にあふれているまちであることの証明なのです。岐阜市の水道水には伏流水が使わ

れていますよね。

最後になりますが、近年、SDGsという言葉をよく耳にします。17の目標を平面的に見ると、8番の「働きがいも経済成長も」は、河川工事による雇用の創出も当てはまっています。しかし、こういった立体的な体系図で見ると、生物圏を土台として、社会圏、経済圏があるという構図の中で、この生物圏を切り売りして8番の目標を達成することは、果たして持続可能といえるのでしょうか。こうしたことを子どもたちに訴えることができるのがこのフィールドだと思っています。さらに、それを実際に川で見せることで、子どもたちにも考える力がついてくると思います。

最後のスライドになります。この町に特化した生き物で作ったイラストです。イタセンパラ、サツキマス、ハリヨ、ネコギギ、アジメドジョウ、アユ、どれぐらい分かりますか。地元にも知らないことがまだまだあります。それを知ると、自分のルーツが分かり、人は安心すると思います。18歳になって地元を出ていく人も多いかと思いますが、ルーツを知っていれば、違う町の違う習慣や文化に触れて戸惑っても、自らのルーツと比較できるのです。自分の中にルーツという物差しがあることで、安心できるでしょうし、内面を磨くことにも繋がると思います。ルーツを知らなければ、比較しようもありません、そこから得られる学びも、自らを深めることもないでしょう。それをあえて義務教育の期間の子どもたちに与えてあげることで、知的な未来を育てることにつながるのかなと思いました。

以上です。御清聴どうもありがとうございました。

## ○佐藤事務局長

平工様、ありがとうございました。平工様におかれましては、この後も引き続き、最後まで御参加いただきます。よろしく願いいたします。

それでは、事務局及び平工様よりの説明を踏まえまして、これより御意見を賜りたいと思います。

本日、皆様に御協議いただきたいことといたしましては、「デジタルとリアルのよさを活かした学びの在り方」、「岐阜市学「ぎふ未来」の取組を推進していくに当たり必要な視点」、この2点について御意見を頂戴したく存じます。

それでは、まず初めに川島委員よろしいでしょうか。

## ○川島委員

平工様、ありがとうございました。私は岐阜生まれではありませんが、お話を聞きながら岐阜のよさを考えることと合わせて、自分の生まれ故郷はどうだったかなと考えておりました。

新しい視点を伝えられたらと思いましたが、お伺いした点について意見を述べたいと思います。

最初に、教育DXの観点からお話をしますが、非常に多くの施策を行い、様々な活用事例を御紹介していただきました。活用の観点だけでなく一步踏み込んで教育の在り方を変えろという視点からみた場合、DXによって我々はどうの姿を目指しているのか、どのように変わるのかを学校に提示し、思いを共有することが重要だと思っています。教育DXの目指すべきところは、一人ひとりに合った教育ができるようになることです。デジタルを活用することで、今まで教室単位、あるいは学年単位で行っていたものが、より一人ひとりに近い教育になっていきます。では、どのような形で一人ひとりに合った教育を実現していくのか。これは、教員の授業準備や生徒と向き合う時間以外の業務を、デジタルを活用することで効率化し、一人ひとりに合った学習や教育ができる環境を実現していくということだと思います。

その他にも、今まで集団での学びを前提にした教材や授業のシステムから、デジタルを活用することで一人ひとりに最適化された教材となること、あるいは一人ひとりの進捗度を測り、最適な学びを提供することなどを通じて、DXの本来の目的である、子どもたちと向き合う教育が実現されるものであってほしいと考えています。

「デジタル」と「リアル」のよさを活かした学びの在り方については、試行錯誤しながら進めていくのかなとお話を伺いながら思っておりました。岐阜市としてどう変わりたいのか、何を指すのかをまずは明確にし、それに向かった施策になっているのかを検証していく必要があると思います。

岐阜市学については、率直な印象として、好きになれと言われて好きになるものなのかと疑問に思っています。岐阜市を愛するということを教えることに抵抗を感じています。これは教育やまちづくり学習の一環ということですが、自分のふるさとを思い返したときに思い浮かぶのは、学校で机に向かって勉強したふるさとの事ではなく、自分が子どもの頃、町や近所の人とどのように関わったかということであり、自分を育ててくれた町に対して、離れても深い思いがあります。

ふるさと学習は、自分が実際に経験や体験をする中で、関わり育ててくれた人や町、自然をベースに、そこから自分の住む町がどんなところであるかを深く知っていくことだと思っています。好きになれと言われて好きになるものなのかと考えたときに、平工様のようなアプローチが一番よいのではないかと思います。好きになれということではなく、体験をしてほしいです。何の感情も湧かないのは、接しない、あるいは体験をしない、会話をしないからです。自分のふるさとに接する機会を多く持つことにより、様々な感情が生まれてくるのではないのでしょうか。そこで町が好きになる子もいれば、場合によっては嫌だと思子もいるかもしれませんが、それが貴重な機会になるのではないかなと思いました。私の意見は以上です。

### ○佐藤事務局長

ありがとうございました。

続きまして、武藤委員よろしいでしょうか。

### ○武藤委員

平工さん、素敵なお話をありがとうございました。率直に言って感動しました。私もずっと岐阜にいますが、知らないことが多く、これを子どもたちが聞いたらどれほど目を輝かせるだろうと、わくわくしながら聞いていました。ありがとうございます。

デジタルに関して、御説明の中で様々な活用例を挙げて頂いた上で、十分に理解できている先生とそうでない先生との差があり、そこをどう埋めていくべきか、という話が出てきたと思います。そのような話は、普段から耳にするところであり、様々な取組で可能な限り先生方のスキルを上げていき、充実させたデジタルツールを有効に使いこなせるようにしていくことは非常に大事だと思います。それを考えるにあたっては、実際に使っている子どもたちがどう感じているのかが参考になるのではないのでしょうか。

私的な話で恐縮ですが、私の妻は、私立の学校に勤めておりますが、デジタルツールを使う機会が多く、しばらく現場を離れていたこともあって随分戸惑っているようですが、子どもたちが教えてくれることが多いそうです。もちろん先生たちが自らを磨いてスキルを上げていくことも大事だと思いますが、実際に子どもたちが使ってみた意見を積極的に取り入れ、大人では気づかなかった使い方を拾い上げていけると、より子どもたちが使えるデジタルになっていくと思いました。

岐阜市学ですが、平工さんのお話で、小学生の目線で和船に乗って岐阜市を見ていくと、様々な岐阜市の見方があり、今まで自分にはなかった見方、考え方を御提示いただけて、新鮮で、わくわくしました。岐阜市にはよいものが多くあり、それをそれぞれの立場で伝え守る大人たちがいます。それは岐阜市という1つの町を、川や自然、産業等様々な視点から見ることで、多様な物の見方、考え方につながる話であると思いました。岐阜市の魅力を様々な角度から見ると、それぞれがそれぞれの岐阜市のよさを感じることができると思います。ほかの人の考えも聞くことで、多様な物の見方、考え方を養う1つのツールにもなり得るのかなと思います。そのような面で、この岐阜市学というものに私は期待をしたいと思いました。ありがとうございました。

### ○佐藤事務局長

ありがとうございました。

それでは、横山委員よろしいでしょうか。

### ○横山委員

どうもありがとうございました。私は愛知県の東三河の出身で、子どもの頃、川魚と一緒に育ったといっても過言ではないですが、アユの捕り方ひとつをとっても、地域によって差があることを知りました。私が育ったところは、ドジョウを餌にして、夜に岩場の穴に仕掛けをしておくと、朝にはウナギが捕れるような地域でした。しかし、護岸工事が行われて以降、魚やウナギが減ってしまい、悲しい思いをしたことを今でも覚えています。

まず、岐阜市学ですが、私はこの学習に期待しています。それは、学校で学んだことが社会とどうつながっているのかを確認するよい機会になるのではないかと考えているからです。子どもにはそれぞれ違いはありますが、感性というのはみな多分にあると思います。子ども一人ひとりが磨きをかける機会になるのではないかと考えています。先ほど岐阜市学の説明の中で、各校独自のカリキュラムを貫く岐阜市学という説明があったと思いますが、この岐阜市学を確立していくのであれば、地域素材を教材化し、系統立てたカリキュラムをつくっていくことが必要であると思います。本日、平工さんは小学3年生という設定でお話しをされたかと思います。岐阜市学という以上は、学年に合ったカリキュラムがあり、それを系統立てて完成させることが最終目標かと思います。そのような意味で、特別授業的な一過性に終わってしまうものではなく、年間を通したカリキュラム、小中9年



間を通したカリキュラムをつくり上げ、子どもたちの根幹を成すものにしてほしいと思います。平工さんが最後にルーツを知ると仰られましたが、岐阜の人間として、岐阜のため率先して活動する人がいてもいいと思いますし、日本全国、あるいは世界に向かって活躍する人も出てきてほしいと思います。しかし、その発射台は岐阜であって、岐阜のルーツを知ることが、よい国際人になっていく源になるのではないかと思います。令和5年度のスタートに向け、自分なりに積極的に意見を言わせていただければよいかなと思います。

次にデジタルの話ですが、課題は全ての教職員の基本的なICT活用能力の向上だと思います。我々が視察に行った際、よい面はよく見るのですが、それを本当に実効性あるものにするためには、基盤となるところがしっかりできていなければなりません。人を育てる、教員を育てることになりますので、必要に応じて予算要求をしていくことも考えるべきではないでしょうか。やる気があり、学びを深めたいと思っている教職員をしっかりサポートしていく必要があると思っています。デジタルのよさは、ポートフォリオのように1か所のファイル内にデータを保存できることです。それにより、子どもたちが自分を振り返ることができるようになります。振り返りは、どれだけ成長したかを自分で確認することであり、自分の可能性にまた向かっていく力が出てくると思います。デジタルのよさを生かして取り組んでいってほしいと思います。どうもありがとうございました。

#### ○佐藤事務局長

ありがとうございました。

それでは、伊藤委員よろしいでしょうか。

#### ○伊藤委員

平工さん、本日はありがとうございました。

このように講演をお聴きことは初めてでしたが、観光は教育につながっているということに改めて感じました。

まず、デジタルとリアルのよさを活かした学びの在り方についてお話しさせていただきます。岐阜市のICT教育は大変進んでおり、GIGAスクール推進室の動きの速さや、ICTの活用に向けた指導主事を配置し、各校を回ることで、大きな結果が出ていると思っております。先ほど御紹介いただいたように、子どもたちも様々なデジタルツールを使

って能動的に動くことができています。

ここまでの活用方法は、イメージしやすく、比較的取り組みやすいものだったと思います。ただ、これから岐阜市がさらにもう一歩ステージを上げようとしたときに、教員や子どもたちにとってイメージしづらく、取り組みにくいことが出てくると思います。そのときに、具体的にこちらが求めているあるべき姿を、動画や漫画など分かりやすい媒体で、例えば理想的な1日のデジタルとリアルを使った過ごし方といったものを示すことも必要ではないかと思います。また、何のためにデジタルの活用を推進していくか、ということをや一度共有しなければいけないのではないかと思います。今、デジタルの活用が盛んに叫ばれていますが、ICT教育をすることが目的となり、子どもが無理にそれに合わせてしまっている光景も見受けられます。教員や子どもの理解度を確認しながら、教育委員会全体で情報を共有し、進めていく段階に入っているのではないかと思います。

主体的、探究的学びが新学習指導要領で出たにもかかわらず、このコロナ禍で、様々な体験が中断してしまいましたが、デジタルを活用して行うことができた体験が幾つもありました。デジタルの活用も継続しつつ、実体験の大切さも改めて見直す必要があると思います。私は、リアルとデジタルは発達段階に応じたバランスが重要で、低学年ではリアルにより重点を置くとよいと思っています。そういった発達段階やコロナなどの社会情勢などを加味したバランスの指標を示すことや、例えば商工会議所のような経済団体と連携し、リアルな体験として企業の地域貢献活動やNPOの活動を取り入れることも大切だと思います。そして、リアルな体験の事例を岐阜市内の学校で共有していただくこともよいと思います。そして、デジタルが得意な先生が認めてもらえることと同じように、実体験の教育が得意な先生の再評価も今後はしていただくべきではないかと思いました。

その中で、リアルな体験を重視する岐阜市学を今後進めていくことは、大切なことだと思います。川島委員もおっしゃいましたが、目指す姿には私も少し違和感がありました。岐阜市学で未来の岐阜市をつくる当事者であることを自覚し、これから自分の生き方をつくり出す人が子どもたちのあるべき姿に書かれていますが、ともすればそれは岐阜に縛りつけてしまうことにならないかと思いました。岐阜市学を学ぶことにより、自信を持って外の世界に送り出せることが目的ではないのかなと思います。外の世界に自信を持って送り出せる子どもを育てるために岐阜市学を学ぶ。平工さんがルーツという言葉を使われましたが、私はアイデンティティーの確立だと思っています。人や訪れた土地、環境に流されず、自分の思いを自分の言葉で語れる人を育てるためには、まず自分が何者であ

るかということ、そのベースが確立していなければ流されてしまうのではないかと思います。どんな町に生まれたか、あなたの故郷で好きなところはどこか、自慢はあるかなど、自分のバックグラウンドは何なのか、それは価値基準、いわゆるアイデンティティーになってくるとと思いますが、それを身につけるために岐阜市学を学んでほしいです。シビックプライドも自発的に生まれなければ意味はないので、押しつけるようなことを言う必要はないのかなと思います。シビックプライドを持ってと言っても、そのときは表面的には受け入れるかもしれませんが、それは自分の血や肉となっていくません。世界に飛び立ち、地球規模で活動もするが、自ら岐阜のために何かできることはないかと考えてくれるような、岐阜の発展を願ってくれるような、世界に行って岐阜の自慢をしてくれるような、そんな人を育てることが目的になると思います。また、夢がない子が岐阜市は少し多いというのも心配されていたと思いますが、夢や目標を持っていないことが悪いことだとは私は思っていません。それは、今を一生懸命生きていて、自分に何が合っているのか、どんな未来があるのか、いろんなことに知的好奇心を燃やししながら興味を持っている時期だと思います。だからこそ、まだ目標がないだけだと思います。模索している期間が長ければ長いほど逆に幸せかもしれません。ですので、そこまで目標がないことに対して卑下する必要はないのではないかと思います。そのために学校教育があって、先生たちが子どもたちの選択肢を増やし、可能性を広げてくれているのではないのでしょうか。以上です。

#### ○佐藤事務局長

ありがとうございました。

それでは、水川教育長よろしいでしょうか。

#### ○水川教育長

平工さん、ありがとうございました。

教育委員さんのお話を聞きしながら、なるほど、やはりそうだなと思うところと、もう少し整理しなければいけないところが見え、ありがたかったです。GIGAスクール推進室を設置した効果か、デジタルの活用に関する教員のリテラシーや能力は高く、順調に進んでいると思いますが、どのような人間を育てるためにデジタルを活用するのかという根本がしっかりしていなければならぬと改めて強く感じました。

教育長になり1年4か月ほど経ちましたが、子どもファーストを掲げる岐阜市の中で、

子どもにとってのシビックプライドとは何だろうとずっと考えています。岐阜市学を考え始めてから、岐阜市にずっと住み続けることや岐阜市を大事にする子よりも、岐阜市から出ていったときに、長時間岐阜のことを話せる子を育てたいと思っています。岐阜市で育って東京へ行った子が、岐阜市について話す機会があるときに、金華山や長良川は話せるが、それ以上のことが話せない子が多いのではないかなと思っています。私の知り合いのお子さんが二十歳になって市外に出たとき、岐阜のことを話せなくて困ったそうです。そこで、成人式で配られたエエトコタントを持っていったそうです。岐阜市の観光ガイドではなく、エエトコタントを持っていったということは、この中に出てくる若者が岐阜市の中でどのように自分づくりをしているのかが、彼にとっては魅力的だったからではないでしょうか。そのような視点で、岐阜市の教育を面白くしていく仕掛けをつくらなければならないと強く思います。平工さんのお話にもありましたが、学びはリアルであればあるほどよいと思っています。デジタルはリアルを補完する、リアルの学びを深化、補充、統合、発展、発信するためのツールとして位置づけるというような構造になっていくのかなと思っています。私は、保育園に通っていた4、5歳の頃から祖父と一緒に魚釣りにでかけていまして、川全体が水道の匂いがすることを経験値として持っています。アユやコイやアマゴの触ったときの感触もよく覚えています。学力とは関係ありませんが、五感でしか感じられない学びを積み上げていくことにより、先ほど伊藤委員がおっしゃったアイデンティティーは、より強固になっていくのではないかなと思っています。直接体験は小さなきが良く、論理的な思考は中学生になってからがよいということが一般的には言われていますが、今、岐阜市学をプロデュースしている中で、そうではないと思いはじめています。つまり、本日の平工さんのお話を小学1年生の子が聴いて感じる事、小学校高学年、あるいは中学生が聴いて感じる事は、ベースとなる知識や思考力が違っており、捉え方も変わってくると思います。例えば、川をテーマに、小学1年生は生活科で河原で遊びましょう、3年生になったら理科や総合で川と会いましょう、5年生は鵜飼の授業で鵜飼観覧船に乗りましょう、中学生になったらSDGsや公民、まちづくりや環境について考えましょう、といったように学年に応じて学びを繋げていくのですが、義務教育のどの世代に平工さんと出会っても、学びは深まると思います。そういった意味で、先ほど横山委員が系統立てよとおっしゃいましたが、岐阜市学は構造化してつくっていかなければならないと思っています。中学校では、自然、歴史、伝統、文化、産業、仕事を別々に学ぶことが一般的ですが、岐阜市学で目指しているのは、これらを連結させた学びです。ある子はシ

ンパシーを自然に置くかもしれませんし、ある子は平工さんの生き方に置くかもしれません。それが、川島委員がおっしゃった個別最適な学びにつながるのではないかと強く思いました。私の知り合いが郡上におりますが、先日の大雨の後に初めてサツキマスが釣れたと話していました。白川郷学園校長をしていた際は、子どもたちにサクラマスに触らせたこともあります。こうした記憶は一生残るものであり、岐阜市の子どもたちにもサツキマスに触れる経験をさせることができれば、大きくなってもサツキマスを知っているよという子どもたちになるかなと思っています。そういった意味の体験を、この岐阜市の教育の中に組み込んでいくとよいかと思います。先日、柳津小学校の1年生約100人に授業をしましたが、岐阜市庁舎に来たことがある子は10人もいませんでした。そう思うと、三輪や網代の子たちも同じかもしれません。実際に市庁舎に来て、市の職員から未来づくりについて生の声を聞いたり、逆に岐阜市の職員の皆さんが市内の学校に出かけていき、授業をしたりといったことも教育課程に組み込むことで、学校は面白くなっていくのではないかと思います。以上です。

#### ○佐藤事務局長

ありがとうございました。

ここで平工様にもぜひ御意見をお願いできればと思いますが、よろしいでしょうか。

#### ○結の舟 代表 平工頭太郎氏

ありがとうございます。本日、私は様々な魚を紹介しました。サツキマスという回遊魚から学びを深めていくと、単に海とのつながりだけではなく、町にサツキの花が咲く頃に姿を現すことにもリンクしていくことがわかります。もう少しすると、ヒガンバナが河原に咲き、それを合図にアユが落ちてきます。つまり、川魚を通じて暦や風土、植物にもリンクしています。

中学の理科で、光の屈折を習ったかと思えます。空気中の光が水中に入るときに屈折することで、水深が実際よりも浅く見えるという現象がよく知られていると思いますが、実際に川に飛び込んだときに、見た目よりも深いということは、小学生のときには体感で覚えるかもしれませんが、中学生であれば、理科の授業とリンクすることで、より強く記憶に残るのではないかと思います。我々は舟の上から船頭ざおを差しますが、光の屈折を考慮して川底にさお尻がどれぐらいで落ちるかを予測してやります。水が透明である晴れた

日には、思っているよりも川が深く、光の屈折を日々の仕事で体験しています。また、小さな頃に川底の暗いところでアユの黄色い斑が光っていたことを覚えていましたが、なぜそのような場所にいるのかは知りませんでした。しかし、今になって、川底で縄張を持っていたということがわかり、経験したことと学びがリンクしてくることをとても面白く感じたこともあります。こうしたことを、我々が主導して学年に応じた体験を提供することで、学びが深まり、ステップアップしていき、最終的なゴールに向かっていけるとよいのではないかと感じました。

私も観光事業をされていて、ご案内するのは多くが企業のCSRや修学旅行です。修学旅行は、東京の学校が多いのですが、鵜飼を見て、その体験から学びを深めていくような形が多く、教育の求めるものが少し変わってきていると感じています。こうした教育と観光との連携をさらに深めていくとよいと思いますし、さらに飲食などの地域経済が加わるようになると、よく問題になるお金の面もクリアでき、持続可能且つより面白いことができるのではないかと思います。本日は、皆様から本当に興味深い御意見を伺うことができました。ありがとうございました。

### ○佐藤事務局長

ありがとうございました。

それでは、市長よろしいでしょうか。

### ○柴橋市長

本日はどうもありがとうございます。平工さんのお話をお聞きしながら、以前舟に乗せて頂いたことを、本当に懐かしく思い出しました。あの日もよい天気で、さおを入れさせていただいたときに、思ったより深いねと話をしました。私が一番覚えているのは、カニにも道があると舟で教えていただいたときに、道というのは川の中にもあるのだなど、童心に帰ったように思ったことです。さお入れだけではなく、操船させていただいたり、川の瀬や投網について教えていただいたりしましたね。その記憶は今も鮮明で、私は自分の息子によく知っているかのように語ってしまうことがあるのですが、あのときの僅か数時間の経験の感動はとても大きく、本何冊か読んだ分以上の学びがあったと感じています。

教育長もおっしゃったように、一番の学びはリアルな体験をすること、自分自身がやってみる事だと思います。それは教室の中でやってみるだけではなく、実際に長良川に行っ

てやってみたり、普段、川舟に乗っておられる格好の平工さんから教えていただいたりすることです。昔の子どもたちは、家業や子ども同士、近所での学びを多く体験していたと思います。そうした機会が、今は非常に少なくなっています。これはやむを得ないことではありますが、そこをどう学校の学びの中に取り入れていくか考えていく必要があると思います。自分が生まれ育っている岐阜市のことを通じて学ぶことは、子どもたちにとってより分かりやすいのではないかと、お聞きしながら感じていました。

私は常々、インサイドアウトということをしていまして、インサイドアウトというのは、何かいきなり世界や日本がということではなく、まず自分を起点に物事を考えていき、その次は家庭、家族、そして友達、近所の方、地域、岐阜、日本、世界へと広がっていきます。伊藤委員がおっしゃったように、まず自分は何者なのかということを経験の中で学んでいくことは、まさにこの教育大綱の中で、一人一人が価値ある大切な存在であることの根幹を成すものであり、さらに互いに認め合うということにつながっていくものです。互いに認め合うときには、自分とは何者なのか、認めてほしい自分とは何なのかを知っておく必要がありますので、それを一番に考え、確立していくことが大事だと思います。私は2歳まで京都、8歳まで神戸で、そこから岐阜に住んでいますが、京都も神戸も岐阜も全部長時間語ることができます。それはなぜかというと、アイデンティティーを確立しているからです。その時々での経験や体験、人との関わりが自分をつくっており、こうしたアイデンティティーをしっかりと認識しているからこそ、今でもこうした地域には関心があり、語るができるのだと思います。だから子どもたちには、公教育の中で自分の人生の目的をつかんでほしいと思います。自分の人生の目的をつかむとは、アイデンティティーを確立するということです。それはつまり、自分は何のために生きているのかを見つけることです。それを見つけていくための要素は様々な学びの中であり、岐阜市学は、特に自分の身近なところにある長良川や金華山、人や文化が題材になると思いますので、そこで育まれている自分とは何者なのだろうと考えていく大きなきっかけになるのではないかと考えています。

デジタルには2つの役割があると思っていまして、1つめは、事務局が説明してくれたように、調べること、写真を撮ることや動画を作ることなど、お互いに学び合うツールとしての役割があると思います。2つめは、学校教育の限られた時間の中で、子どもたちが全身で感じ、感動するリアルな生きた学びの時間を確保するために、効率的にやれるところを効率化し、時間を生み出すという役割です。学校業務改革は、子どもたちと先生方が

しっかりと向き合っていただく時間を確保するために行っている、ということと同じように、デジタルの活用は、よい意味で学びを効率化することで、子どもたちの真の学びに結びつけられる時間や機会を確保するためでもあると思っています。ただでさえ学校の先生方には大変御苦労いただいて、様々なことをやっただいていいる中で、我々が新たにこれもやりましょうという、先生方も大変です。ですから、今あるタブレットをしっかりと使い込んでいくことが必要なのです。これはこれまでも発言してきたことです。例えば、期末テストの作成や採点に時間がかかってしまうのであれば、私はタブレットでAI単元テストでもよいのではないかと思います。基礎的なこと、定量的にできることはデジタルの得意分野ですので、AIも含めて大いに活用し、生身の人間が生身の五感でもって体験すべきところは体験していくということが、皆様の議論をお聞きしながら、デジタルとリアルをどうつなぎ合わせていくかということなのではないかと感じたところです。

私はよく岐阜城の話をしますが、なぜ岐阜城にこだわっているかという、先ほど教育長がおっしゃったように、子どもたちが岐阜の魅力伝えるテーマとして、岐阜城は最高だからです。岐阜の子どもたちには、長良川や柳ヶ瀬、境川を自慢してほしいですし、岐阜城は最高だよと自慢をしてもらってもよいと思っています。私は歴史が好きなので、自分だったらそういう自慢をするかなと思ったときに、我々はそういった地域の資源を、今まで自慢できるようなものとして子どもたちに見せてこなかったのではないのでしょうか。大人の責任として、子どもたちに地域の本物を見せ、触れさせて、これが実はとても価値あるものなのだ伝えることで、子どもたちがどこに行っても、どこ出身なのかと聞かれたときに、岐阜だと自信を持って伝えられるようになるのではないのでしょうか。今、様々な場面で国際化や英語が大事だと言われますが、実際、英語を使って何を伝えるのかといったときに、自分の町を知っていることは大事です。自分の町の自慢を、自信を持って伝えられるのが真の国際人ではないかと思っています。また、インサイドアウトの観点から言えば、岐阜市学をさらに尽き詰めていくと、日本のことや、世界のことへと広がっていきますので、岐阜市学にはそういった意味での可能性もあるのではないかと思います。

最後に、教育長がおっしゃった中で、エエトコタントが自慢の1つになっているというものがありましたが、これは実は狙いどおりでして、あえて岐阜市のシティプロモーションの冊子を観光ガイドブックのようにはしませんでした。観光は観光でガイドブックがあるので、このエエトコタントは、岐阜市で様々な思いを持って活躍、活動されている人に



フォーカスすることをコンセプトに、現在2か年目ですが、3か年の3部作で作成しようと思っています。エエトコタントに掲載されている人たち、あるいは平工さんのような岐阜市の本物の大人に出会って、ふるさとにはこんな大人がいるのだということを共感し、自分もそういう大人になりたい、中には岐阜へ帰ってきて、自分が今度はそのような立場になっていきたいなどと思ってくれるとよいと思います。このエエトコタントでは、既に名が知られている方だけでなく、様々な方を取り上げており、岐阜市学の教材にさせていただいてもよいのではないかと考えているくらいです。私が言いたかったのは、岐阜市学をやるときに、ネガティブなことや課題といったものを取り上げる必要はないのではないかとということです。我々は、まず課題認識をして、それに対する解決策を、といったようにやりたがるのですが、ネガティブな情報から始めると、子どもたちの自己肯定感やセルフイメージ、自分の町に対するイメージを下げるところから始まってしまいます。そうではなくて、岐阜市には素敵な大人がいるよ、こんな自慢できるものがあるよ、こう変わろうとしているよというように、自分の生まれ育ったところがとても素敵な町であることを、子どもたちには学んでほしいと思います。仮に課題を取り上げるのであれば、それに対して、こんな素敵な大人がこんな関わりを持ってみんなのためによくしようと活動しているのだというように、全部ポジティブに転化して伝えてあげてほしいなと思います。アパレルを題材に、産業規模の縮小や問屋町の現状などを岐阜市学で行うと、マイナスからのスタートになってしまいます。そうではなくて、ここにいらっしゃる川島委員や岐阜シャツのプロジェクトをやっておられる経営者の方たちがいらっしゃるのだ、というところから入っていったほうが、子どもたちには圧倒的に伝わるのではないかと思います。

そのようなことを常々考えていますので、子どもたちにとってよりよい岐阜市学にしていだければありがたいなと思います。以上です。

## ○佐藤事務局長

ありがとうございました。

本日は、皆様から多くの御意見を頂戴し、誠にありがとうございました。いただいた御意見等は、事務局で改めて整理をさせていただき、最終回にて全体総括としてお伝えさせていただきます。

なお、本日の会議録につきましては、後日、本市ホームページでの公開を予定しておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、お時間も迫ってまいりましたので、本日の会議を終了したいと思います。

また、平工様におかれましては、本日は御多用の中、御出席を賜り誠にありがとうございました。

次回の総合教育会議は8月31日を予定しております。詳細につきましては、改めて御連絡申し上げます。

それでは、これもちまして令和4年度第1回岐阜市総合教育会議を閉会いたします。本日はありがとうございました。

---

(15時30分閉会)